



2019年(令和元年)

5月30日
木曜日

地域とともに

発行所
山陽新聞社
岡山市北区柳町2-1-1

電子版山陽新聞デジタル
https://www.sanyonews.jp

スマート農業

超省力化革命への挑戦

昨年7月の西日本豪雨で大きな被害を受けた倉敷市真備町地区。復興のつち音が響く同有井の住宅街を抜け、しばらく北へ車を走らせると、のどかな田園風景が広がって来る。

「高台にあるので水害は免れたんですけど、農地の担い手が少ないんです」と、昨年からの地で青ネギやキャベツなどを栽培するクラカアグリ(同市西中新田)の牛丸博穂主任(40)が明かす。見回すと1カ所10ア程度の小規模な農地が多く、基盤整備が遅れて用排水路が十分整っていないところもある。周辺を走る農道が狭く、大型の農業機械を使うのは難しく、効率の悪さから耕作放棄地の増加が問題

第1部 園芸作物編

② 小規模多筆



青ネギの収穫現場でアプリに作業記録を入力する松本さん(右)＝倉敷市真備町市場



アプリの画面。管理する農地が栽培する作物ごとに色分けされている

スマホ使い農地管理

を請け負うようになっ
た。国土が狭く、山がちな日本では、こうした小規模多筆地域は珍しくない。同社が経営する農地(計12珍)は同地区のほか、総社市、矢掛町の約120カ所にもまたがっている。

アプリで記録

経営に不利な小規模農地をいかに効率的に管理するか。同社はスマートフォンをうまく活用し、タップするとその農地をいかに効率的に管理するか。同社はスマートフォンをうまく活用し、タップするとその農地

ながら壁を乗り越えようとしている。農地はそれぞれ土質が目、社員の松本章宏(27)がスマホをのぞき込む。使っているのは、新潟市のベンチャー企業ウオーターセルが開発した農業支援アプリ「アグ

リノート」の画面。管理する農地が栽培する作物ごとに色分けされている。農地はそれぞれ土質が目、社員の松本章宏(27)がスマホをのぞき込む。使っているのは、新潟市のベンチャー企業ウオーターセルが開発した農業支援アプリ「アグ

「現場ですぐに履歴の確認や記入ができるのが便利。使った農薬や肥料を証明できるので、安全性もアピールできる」と松本さんはメリットを説明する。

農家を支援

「小さな農地であっても、もうかる農業はできる。そのモデルをつくりたい」と富本尚作社長(67)は、2016年にクラカアグリを設立した理由を語る。同社は耕作放棄地や小規模な水田を活用した野菜の産地づくりを目指し、新見市大佐地区の農家グループの支援も行っている。

専用の農業機械が必要なく、苗の定植は同社が割安で代行し、きた作物は親会社の倉敷青果荷受組合(倉敷市西中新田)が全量買い取る。施肥、水やりといった栽培管理は地元農家に任せ、頼りになるのはやはりスマホだ。

生育状況は農家が逐一、通信アプリを使って写真入りでクラカアグリに送る。それを社員が見れば対策をアドバイスする。少ない投資でも収入が安定することから、グループに参加する農家は当初の3人から12人に広がった。

「雑草が生えて荒れ放題だった農地がきれいになった」

キャベツ畑に変わり、前向きな気持ちになった」とグループに所属する梶原洋子さん(59)。もうかる小規模農業は農家の活性化にもつながっている。(久万真毅)